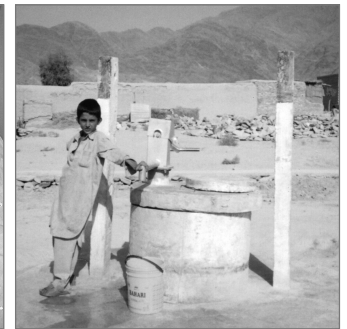
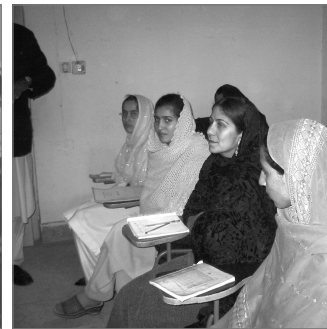


# Trial & Error

No.248

November - December 2005



〈東部ナンガルハル県にて実施する4つの活動〉

特集

# Afghanistan

地域のために、地域とともに

# Afghanistan

地域のために、地域とともに

9.11後の空爆から4年、アフガニスタンは「復興」の最終段階を迎えた、と言われている。「国家」という大きな枠組みの形成は着々と進んでいるように見えるが、そこに住む人々の「暮らし」という小さな枠組みの行く末は、いまだ判然としない。

長い戦乱、国際社会による援助とそれへの依存心、今も続く武装勢力や軍閥による権力争い。それらに翻弄されながら、それでも人々の暮らしを支えてきたのは、人と人との「繋がり」であり、イスラム文化ならではの助け合いの仕組みだ。

歴史の流れのなかの大きな転換点にあるアフガニスタンで、外国のNGOとしてなにができるのか——、空爆直後から現地に入り、地域の人々とともに活動してきたJVCの視点をお届けする。(編集部)

## アフガニスタンに かかわる三つの視点

アフガニスタン事務所代表

谷山 博史

二〇〇五年三月のJVC年次計画会議に提出された「JVCのアフガニスタンでのかかわり」という資料に、JVCがアフガニスタンにかかわる視点として次の三つが提示されている。以下、これらの視点に沿ってアフガニスタンでかかわる意味を考えてみたい。

①アフガニスタンは、先制攻撃によって国の政権を倒し民主的な新しい政府を作るという「対テロ戦争」の最初の、そして象徴的な事例である。この国にかかわることは、対タリバン戦争及び現在も続いている「対テロ戦争」によってもたらされる結果を現場で見極めることを意味する。

それは日本の「平和」と「国際貢献」のあり方を考えることでもある。

②アフガニスタンは米英を中心とする連合国による戦争の影響だけではなく、米ソ冷戦の代理戦争の負の遺産を重層的に抱え込んでいる。アフガニスタンの人々にかかわるということは、冷戦の後遺症を引きずるア

フガニスタンの今を検証し、又はその証人となることをも意味する。

③復興期の援助ではNGOが国際機関や現地政府の下請けとなる傾向が顕著である。単なるサービス提供者としてではなく、活動地の人々と相互の信頼に基づいた協働者としての関係を築くことができるか。そのためにはたとえ規模は小さくてもアフガニスタンの人々の自助努力を支援するというスタンスを貫く。

### 1 「対テロ戦争」に ともに向き合う

私たちがアフガニスタンで活動することを決めるとき、私たちが突き動かしたものは「そこに悲劇がある」ということだけではなかった。このままにしておけば、戦争によって殺戮が行なわれるかもしれないアフガニスタンの人々と日本の私たちが、グローバルイニシアティブと「対

テロ戦争」という時代の生々しい現実と共に押し潰されるかもしれない、という危機感を持ったからだ。

タリバンを武力で駆逐し、新たな政権を作るといふ試みが成功したかどうかは、軽々しく結論を出すことはできない。憲法制定、大統領選挙、そして九月に予定されている国会と地方議会の選挙という政治プロセスは、これまでのところ着々と進展しているように見える。しかしタリバン時代はもとより、タリバン崩壊後一年目に比べても治安は悪化してきている。そのため外国の援助機関は地方での活動を直接実施できず、現地NGOに委託するケースが多い。しかし、委託管理の体制が甘いためにNGOによる汚職の構造が生まれ、アフガニスタンの人々の間に援助不信を招く結果になっている。

タリバンをはじめ、反米・反政府ゲリラ活動を行なう武装グループは、国連やNGOを米軍の手先と位置付けて襲撃の対象としているが、援助に不満を持つ人たちにこのメッセージが受け入れられる恐れがある。今年五月にジャララバードであったデモの際に援助機関が襲われた件では、群集の中に反政府ゲリラ分子がいて、巧みに民衆を誘導していた可能性が高い。

JVCアフガニスタンで三年間活動をしていたのがつくのは、アフガニスタンスタッフの間に露骨な嫌米感が



# Afghanistan

2

## 戦争の遺産を 見つめる

二十五年に及ぶ戦争がアフガニスタンにもたらしたものは何だったの

現れていることである。人々の間で米軍の援助を喜ぶ声もないとは言えないが、これは東部及び南部地域のアフガン人の意識をある程度反映していると見てよい。彼らは、米軍による民間人への誤爆・誤射、不法逮捕、横暴な米軍の振る舞いを日々見聞きしているのである。

JVCスタッフの母親が米軍に撃たれた時、私たちが連合軍との会議でこの問題を取り上げ米軍に対して事実調査と家族への補償を要求したのは、アフガン人の立場に立つよそ者が必要だからである。同じような被害にあって泣き寝入りせざるを得ない人々が何千、何万といえるはずである。彼らは国際社会に知られることもなく、密かに復讐を決意するであろう。米軍を批判することは現地ではリスクを伴うが、そのリスクは外国人には比較的小さい。しかも交渉は単独で行なわず公然と、かつ他のNGOと共同して行なう必要がある。たとえ米軍相手でも、見て見ぬ振りをしないこと、それが私たちにとって「対テロ戦争」の現実を見極め、その現実をともに生きることであると考えるからである。

か。アフガニスタンの人々がこの後遺症から立ち直るにはどういう支援が必要なのか。私たちは、社会の隅々にまで力の支配の論理が蔓延していることに愕然とする。アメリカのアフガニスタンへの武力介入はタリバンを駆逐したかわりに、地方の武装勢力をよみがえらせた。冷戦期、アメリカをはじめとした西側諸国はムジャヒディンと呼ばれる武装勢力に軍事援助を行なうことでソ連を追い出すことに成功した。しかし、ソ連撤退後は各武装勢力が互いに争い、各地域を支配することになった。これらの大小の軍閥が息を吹き返し、今でも県や郡の行政を牛耳っている。

復興の政治プロセスに組み込まれた武装解除のプログラムは、これら軍閥の解体を狙っているが、数字で示される成果とは裏腹に、内実は彼らの武器の所持を公認する結果となってしまうている。そして、議会選挙にも参加できることで彼らが政治的な実権をも身につける機会を与えてしまった。また、今年三月から九月までに軍民合わせて千二百人のアフガン人が亡くなっている。これには、選挙に絡む対立が原因となつたケースが少なくない。

した人もいる。この結果、農村の土地所有関係が曖昧になり、土地をめぐる紛争が後を絶たない。しかも紛争がすぐに殺し合いに発展する。このことは、伝統的に村の自治を担ってきたシュウラ（村評議会）が形骸化したことにも関係している。シュウラが村内の土地問題を解決する能力を失っている例がまま存在する。武装勢力の地域支配と村の自治機能の形骸化、この二つは復興から開発へ進む上で最大のネックになっている。

3

## 地域の資源を生かす

地域の資源を生かさなければ復興も開発も実を結ばないというのが、JVCの変わらない信念である。例えば今年から診療所の支援を始めるゴレイク村では、約千世帯の地域が八つの小村に別れ、各村の村長八人がシュウラを形成している。この村とは伝統産婆の支援以来二年間の付き合いがあるが、シュウラの合意形成能力や各村長の力関係などわからないことが多かった。

二十五年の戦争の期間、農村人口はめまぐるしく変動した。東部パシュトゥーン地域を見ると、農村部で難民化した人々は人口の半数を越える。数回も難民化と帰還を繰り返

の元院長の不正事件に対する院長追放運動が始まったのを機に、両者は力を合わせるようになった。JVCが新たな活動を始めるにあたって、必ず両者が同席の場で合意を取り付けるようにしてきたこともあり、現在はシュウラが合意形成の場として機能している。これは村の自治機能という地域資源を尊重し生かす最低限の配慮である。こうした配慮が行なわれない援助活動があまりに多いのが現実である。それは、短期間に資金を消化し活動を終われようとするからであるが、一年や二年では村の現実は見えてこない。

また、村の伝統産婆をJVCが重視するのも理由がある。これは村内の個人としてリソース・パーソンを探るためである。伝統産婆さんは、村の中では「世話焼き婆さん」のようなもので、家族の範囲を超えて自由に活動できる貴重な存在である。出産介助の活動を通して村の家族の状況をよく知っている。この人たちの産婆活動の延長線上に、女性の互助の仕組みが成り立つ可能性がある。

下からの自主的な活動が村のシュウラによって担保されることで、「参加型活動」は保証される。しかし、それも武装勢力の脅しや政府の過剰な介入がなく、もちろん戦争もなく将来のことが考えられるようになって初めて可能なのである。



# Afghanistan

## 地域共同体とともに すすめる四つの活動

現地調整員 本間 一

○一年度後半からアフガニスタン東部地域で保健医療活動を継続している。緊急救済として巡回医療活動をアフガンNGOと協働で実施し、同時に保健省や海外医療系NGOとの協力・調整に力を注いできた。その結果、わずか一年間支援したクナール県カスクナール郡唯一の公立診療所は、保健省と海外の大学調査機関との合同評価によって、同県における○四年度のナンバークリニックであるとの評価を受けるに至った。

○本年度後半からアフガニスタン東部地域で保健医療活動を継続している。緊急救済として巡回医療活動をアフガンNGOと協働で実施し、同時に保健省や海外医療系NGOとの協力・調整に力を注いできた。その結果、わずか一年間支援したクナール県カスクナール郡唯一の公立診療所は、保健省と海外の大学調査機関との合同評価によって、同県における○四年度のナンバークリニックであるとの評価を受けるに至った。

### ナンガルハル県北東部における女性と子どもの健康改善支援事業—— 4つの活動の今

#### ① 診療所支援

○五年四月からナンガルハル県シエワ郡ゴレイク集合村の診療所の支援を開始、診療所を拠点として村の保健師や伝統産婆の支援体制の確立を目指している。診療所とその管轄地域での支援内容に関しては、県保健局長と六月に合意し、それを受けて新規採用の現場医療スタッフ（男女）による診療が開始された。また、コミュニケーションヘルスワーカー養成研修に参加する候補者選考を各村の代表と実施している。

#### ③ 女性医療従事者養成コース

地方で活動する女性の助産師と看護師の養成施設を支援するべく、五月に施設長と支援内容に合意した。支援物品に関しては調整がつき次第購入を開始し、新学期が始まる九月以降に順次納入していく予定である。

#### ④ 安全な水の供給と衛生教育

この活動は、アフガン人技術者集団が組織する地元NGOとの共同事業である。二郡三集合村で約九十カ所に新たに井戸を設置し、利用者に衛生教育を提供する一方、住民参加の方針に沿って村人自身が労働力や資材を提供し管理責任を負うものである。井戸の設置を管轄する農村復興開発省とは六月に契約が成立し、これを受けて先発調査が七月に開始され、現地事務所を立ち上げた。予定数四十五の内すでに十七カ所以上の井戸設置場所が地域住民の合意の上で確定した。同時進行の衛生教育については、男女トレーナーへの研修や教材づくりが完了した。

#### ② 伝統産婆の職能向上研修

○四年度に研修を行なった四集合村の四十九人の伝統産婆の現状把握のため、五月にJVCの女性助産師を各村に派遣して産婆さんとの面接調査を実施した。その結果を参考に、八月には全伝統産婆に対して産婆用キットの補充と助産師によるフォローアップ研修を実施した。

※次ページに、本活動における今後の展望をまとめた。



# Afghanistan

## 伝統産婆さんのトレーニングと今後の展望

JVCは03年10月よりアフガニスタン東部ナンガルハル県の保健局と協力し、母子保健活動の一環として伝統産婆能力向上のための支援活動を開始した。現在、3郡4地域で活動を実施している。また、同県シェワ郡では03年より校舎増築など女子教育支援活動を行なっている。

女性活動担当

谷山 由子



■お産婆さんたちから話を聞く

「伝統産婆」と私たちが呼ぶ村のお産婆さんは、どの村にもいるというわけではないらしい。診療所支援をしているゴレイク村から数キロ離れた村では、誰の助けも借りず出産をしたり、義理の母親に介助してもらったりしている母親が少なからずいることがわかってきた。

これは、治安が比較的安定してきた今年八月、JVCと地元NGOとでゴレイク村とその周辺村八カ村で各世帯数の四%の世帯を訪問し、生活実態を理解するための聞き取り調査を行なった結果、明らかになった。この聞き取り調査は五日間に行なわれ、家族構成や識字レベル、健康状態や医療サービスの利用状況などについての質問事項について、計百九世帯からの回答を集めた。

た。現在、集計・分析している調査結果は、今後の活動成果を判断する指標となり、同時に活動の優先課題を明らかにするために使われる。ひとつの例としてあげたお産婆さん不在の実態も、要検討課題のひとつとなるだろう。実際の現場の状況はどうなっているのか、お産婆さんたちの声を聞いてみたくなった。

聞き取り調査もひと段落した九月上旬、ゴレイク村の伝統産婆さんたちが前月の活動報告と基礎知識をリフレッシュするために集まった。この村のお産婆さんは十三人。世帯数が約七百五十あると言われているので、一人が約五十七世帯を受け持っていることになる。他の村から比べると恵まれている。この日、先ほどの調査の結果をどう思うか聞いてみた。すると、「自分たちのようにトレーニングを受けていない人が介助すると危険だ。何かあった時に適切な処置もできないだろう」と口々に訴え憂えていた。だが、彼女たちが自ら隣村まで出向くことはありえない。越境することへの抵抗やそれ以上に他村で無償活動するほど生活に余裕がないというのが理由だ。

しかし、村で女性たちが安心して出産できる環境を整えるためには、誰かしら出産に関する基礎知識のある人の存在が必要になる。しかし伝

統産婆もいない村で、何から始めたらいいのだろうか。このことを伝統産婆支援担当のアフガン人女性スタッフと話をしているうちに、ある案が浮かんだ。「おばあちゃん向け勉強会」を開くというのはどうだろう。近隣の村のお産婆さんたちと共同で村の評議会メンバーの奥さんを対象に、出産介助の基礎や危険な状態の妊婦を病院へ移送する方法などを指導するのだ。こうしたアイデアを話の糸口にして、いろいろな立場の人たちと話し合いを重ね解決策を探っていくことになるだろう。

最後に女性支援のもうひとつの活動、シギ女子学校支援についてだが、九月の国会・地方議員選挙後に、新教室向けの机や椅子の設置を予定している。日本の生徒さんたちからの物を含む二十九通の手紙や折り紙は、九月中旬から新学年を迎えるシギ村の女子学校の生徒さんに渡す予定だが、さてその返事はもらえるものか。インシャ・アッラー（アッラーの御加護がありますように）。皆さんの思いが伝わることを祈っている。次の一時帰国の際に結果をお伝えする予定なので、楽しみに待っていてほしい。



# Afghanistan

## 海外援助機関による医療支援における問題点

復興過程における援助活動においては、様々なアクターがかかわり合うことからそこに複雑な利害関係が発生し、それをもとにした問題が発生する場合がよく見られる。今回、JVCアフガニスタンが現地で遭遇した状況を事例として示す。

### 本間 一

現地調整員

#### 事例・一

JVCが〇四年度に続き〇五年度

も継続支援を計画していた診療所のあるクナール県カスクナール郡では、アメリカの医療系NGOがECのファンドを受けるためイギリスに仮渉外事務室を設置し、カブールの保健省幹部を米国に招待するなど根回しを図った結果、ECファンドが獲得でき保健省の新しい方針に沿ってカスクナール郡を含めた数郡ですべての医療活動を本年四月から担当実施することになった。

JVCはそれ以前からのクナール県保健局の要請で同診療所を支援することを決めており、該当NGOと再三協議を行なったが、彼らは保健省の決定を盾に譲らなかった。結局、JVCが実地訓練を実施したほとんどの医療スタッフは解雇され、四月以降JVCは当診療所およびカスクナール郡において一切の保健医療活動ができなくなってしまう。

わずか一年で当診療所を県ナンバーワンに押し上げた実績は、診療所スタッフはもちろん地域住民の代表たちが四月以降も相次いでJVCを訪れ、診療所の外での医療活動継続を懇願したことから、高く評価

されていることが改めて認識された。

なお、該当NGOがJVCから引き継いだ当診療所に関して、四月以降に次のような報告が患者や住民からJVCに報告されている。

①薬は高品質のものが七十種類提供された(JVCは八十三種類)が、バラで配布され説明が不十分、診療所脇の小川に捨ててしまう者もいる。

②当初村人は女性医療スタッフに期待していたが、診断から薬支給と事務的に扱われる、貧血症状を緩和するくらいの治療しかできないので不満を抱いている。

③新しい男性医師が、郡事務所の子キョリティチーフが連れてきた病人の処置がわからず、患者と口論になった。また、同医師がある男性患者の処方箋に薬名を書いたあと、その薬の効能と副作用を訊ねられたが答えられなかった。

#### 事例・二

JVCが支援を予定している医療従事者養成コースには、複数の国際NGOがかかわっている。そのため、JVCの支援品リストは本コースを支援する他のNGOと調整して作成する。ところが、先述のNGOは、数

年間にはわたり女生徒の送迎バスや文房具などを支援しておいて、〇三年の新学期開始直前に予算が無いからと一切の支援から予告なしに手を引き、当時の施設長やNGOから非難を浴びた経緯があった。ところが翌年、今度は十分な資金がUSAIDから入るとして、他のNGOに本施設への援助を中止するように呼びかけて、再び集中非難を浴びた。

また、半年前には、同NGOが支援する助産師コースについては独自予算ですべての物品支援を行なうとの立場から、保健省直轄の施設であるにもかかわらず、女生徒を三カ月以上自前の研修センターに移して研修を実施した。また、JVCの仲介で日本大使館の支援により新築された女性コース研修棟にも、豊富な資金を利用して専用区画を設けて、当地の教育訓練施設では稀有なエアコンなどを備え付けている。

このような状況から、支援の重複を防ぐために先の支援品リストの一部を急遽変更せざるを得なくなり、本年九月の新学期に間に合わせる予定の支援が遅れた要因のひとつになってしまった。

※注① European Commission  
※注② United States Agency for International Development



# Afghanistan

## 日本国内での提言活動

アフガニスタン事業担当

長谷部 貴俊

### ■軍事作戦は終わっていない

アフガニスタン。議会選挙、タリバン掃討作戦、痛ましい日本人殺害事件等、時折ニュースでは取り上げられることはあるが、どこか忘れられた国になりつつある。それとは裏腹に、アフガニスタンの状況はますます複雑となっている。米軍を中心としたタリバン掃討作戦は継続され、それに伴う民間人への誤爆・誤射は後を絶たない。また、米軍はNGOを無視した力まかせの援助活動も実施している。力による押し付けの民主化と復興。そのアフガニスタンを現場からウオッチしていく義務がNGOにはあり、それを日本でも伝えなければいけない。今年度JVCは、アフガニスタンのDDR (Disarmament, Demobilization & Reintegration / 武装解除・動員解除・社会復帰) と軍による人道援助について提言活動を実施している。ここでは日本国内での活動を伝える。

### ■不完全なDDR

治安回復が重要なアフガニスタン

で、これまで日本政府主導で地方軍閥のDDRが実施された。紛争後の社会において、DDRは復興・民主化政策の重要なプログラムとして位置付けられており、すでに六万人以上が武装解除され、社会復帰プログラムが継続中である。JVCはこれに関して現地調査を元に報告書をまとめ、六月に町村外務大臣宛にこれを提出し、アフガニスタンに関わる国際NGOや研究者にも配布した。

この報告書では、一点目として、アフガニスタンでは全土で下級・中級司令官が地方の権力を掌握しており、DDRが彼らに焦点を当ててこなかったことを指摘し、結果としてその多くが武器をいまだに貯蔵し、権力を保持し続けていることをあげている。二点目に、社会復帰計画があまりにも個人に焦点を当てており、DDRがより広範に、女性、地域経済、社会構造等にとどのような影響を与えるのかを考慮するように求めている。そのうえで、現在も力を持つ不法武装集団の武装解除にきめ細かい戦略を持って取り組むことの必要性を訴え、そのために、これまでの取り組みの再評価を求めている。

### ■軍による人道援助の弊害

また、提言活動のもう一つのテーマが軍による人道援助である。アフガニスタン全土で、米軍主導十四チーム、NATO主導五チームが人道支援活動を大規模に実施しており、特に米軍はこれを対テロ作戦の一環として実施している。アフガニスタンはPRR (Provincial Reconstruction Team) と呼ばれる。戦闘を本来の目的とする軍隊が人道援助をすることで、様々な弊害が出ている。

### ■問われるNGOの立脚点

今後、JVCはアフガニスタンの平和構築にどう国際社会(特に、軍を含むアメリカ政府、日本政府)が取り組んでいるのか、ウオッチし、提言活動を継続していく。特に、軍による人道援助の問題は、アフガニスタン復興のみの問題でなく、将来想定される日本の自衛隊の海外派遣とも関係するので、その危険性・問題点を提起していきたい。

興味深い記事を紹介したい。「PKOセンター設立を目指す 陸自に国際活動教育隊」(六月七日付毎日新聞)と書かれたこの記事を要約すると、「今後、静岡県陸上自衛隊駒門駐屯地に国際活動教育隊を発足させ、将来的にNGO職員、警察官も対象としたPKOセンター設立を想定している」となる。これは政府主導の国際平和活動の一例であるが、NGOはこの文脈に巻き込まれつつある。憲法改正(改悪?)議論も政治家の間で進んでいるなかで、日本政府が掲げる国際平和のあり方に対して、NGOが何を言い、どう行動するのが真剣に問われている。

七月、ジャララバードで会ったあるNGOのアフガン人はこう言った。「九・一一以前、我々アフガニスタン人は世界から何十年間も忘れられていた。世界が一度忘れたアフガニスタンを、再び忘れてはいけない。」

※注① 05年2月、カスクナール診療所に米兵及びアフガン兵が乗り込んで、患者の症状を聞くこともなく大量の薬を配布した。配布された薬のなかには、妊婦や子どもが使用してはいけないものも含まれていた。  
※注② 05年7月、AMIが支援するクナール県の診療所で、米兵または外国人が勝手に診療及び薬の配布を行った。

## 明日に向かう希望を応援したい



### 加藤 登紀子

歌手

43年ハルビン生まれ。東京大学在学中に歌手デビューし、05年には歌手生活40周年を迎えた。2000年からUNEP（国連環境計画）親善大使を務め、環境問題にも積極的に取り組んでいる。

タイ、スリランカへ津波後の状況を見に行ってきた。

タイではマレー半島西側のアンダマン海沿いに被害が大きく、私が訪ねたのは最も多くの犠牲者が出たパンガー県のカオラックだ。少数民族の人たちやミャンマーからの出稼ぎでIDカードを持たない人々など、タイ政府の支援の届かない人たちのケアも大きな課題になっている地域。

ここでJVCの堤由貴さんにお会いし、新しい家の建設を含めたコミュニティづくりを紹介してもらった。竹で編んだおしゃれな外壁、高さメートルのコンクリートの高床、家の前には雨水をためる大きな水がめ。これが、新しい復興住宅のデザインだ。

村の中には、孤児も対象とした児童施設やコミュニティ向けのFMスタジオ、炊き出しの炊事場やお茶を飲むカフェなどもあり、若い女の子やおばちゃんたちが楽しそうに働いていた。その奥では、若者たちがJVCから送られた製材工具で大工仕事をしている…。大きな犠牲からまだ八カ月。でも、明日に向かって暮らしを築こうとする希望が小さな足音をたてて歩き出していた。

九二年、カンボジアのプノンペンでJVCと出逢い、二〇〇〇年には南アフリカの黒人居住区での小学校支援を応援できた。地球のすみずみにまで入ってきめ細やかな支援をしているJVCの活動をこれからも応援していきたいら、と願っている。



## JVC 応援団からのメッセージ

### 「自立を勝ち取る」ための農業へ



### 杉山 岳

農民

90年代半ば、JVCのボランティアとして東北タイの村に1年間滞在。97年に茨城で就農。タイの農民が育てた桃源郷のような森が理想だが、まだまだ現実に振り回されている。「考えているうちが一番楽しい」との言い訳からそろそろ卒業したい。

農業で暮らしはじめて八年目になりますが、今年は散々なことが続きました。

まず、三月に膝の手術で一週間入院しました。村では猪と格闘したため、七月には蚊に噛まれて二週間。それまでは寸前に気づいて事なきを得たことが何度もあったので、油断したのでしょうか。

確かに、田畑を荒らして数カ月の苦労を台なしにする猪も、時に命も奪う蚊の毒も怖いものです。でも、田畑は来年また頑張ればいいし、蚊に噛まれて死ぬのは寿命のようなものです。

遣伝子組み換え作物（GM作物）の怖さは、やり直しがきかないという点で、猪や蚊とは次元の違う怖さです。健康や生態系に与える不測の悪

影響も大問題ですが、遣伝子の汚染、GM作物の混入は農民や消費者から選択肢をなくし、自立を奪います。だからこそ、「グローバルイズム」の望むところでしょう。

一方で、GM作物の出現は、凶らずも農民の自立がどうあるべきかを指し示しました。それは、種や鶏のヒナ、飼料のほとんどを買って「自立している」と思い込んでいた僕のような農民にはとても難しい自立です。でも、JVCの大きな課題の一つである「自立を勝ち取る」ために、小農民として、自分なりのやり方で自分の足元で、自分の種を育て守っていくし、ありません。これまで、困難な状況だからこそ光を見出してきたJVCのように頑張りたいと思います。



# スタートラインに立つ<sup>ピョンヤン</sup>平壤の『ともだち展』



コリア事業担当 寺西 澄子

いま、簡単に会おうことのできない、写真や映像でも見ることのなかなかできない、そんな子どもたちの「顔」を伝えたい。そんな想いから始まった『南北コリアと日本のともだち展』が、今年も8月末に平壤で開かれた。



■自分たちの描いた絵をみんなで取り囲む。

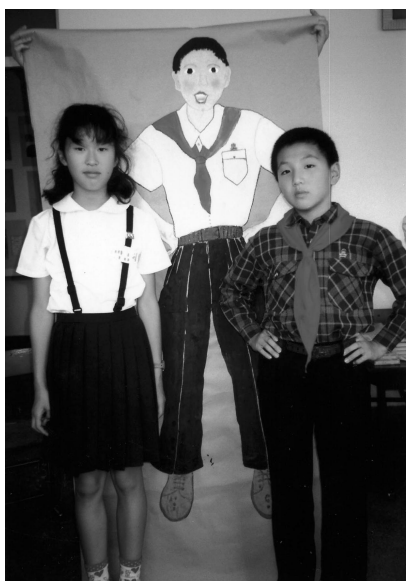
これまで何度もくぐった平壤市ルンラ小学校の門は、いつになく私たちを歓迎してくれているようだった。校庭でサッカーをしていた少年たちがゲームを一時中断して手を振ってくる。以前なら、「お客が来た！」と慌てて片づけ態勢に入り、気が付くとひとりもいなくなっていた校庭。今は、私たちの通り過ぎたあとともゲームが続ぎ、活気のある声が響いている。こんな小さな変化にも心を動かされながら、絵画展の会場となる学校に足を踏み入れた。

日本、北朝鮮、韓国に住む子どもたちの絵が一つの会場に集まる『ともだち展』が平壤に出張するのは四回目。東京の朝鮮学校に通う五、六年生四名とともに訪朝した。毎回、小さな発見や新しい変化があるのだが、

今年の空気はこれまで感じたことがないくらいに余裕のあるものだった。絵画展開幕の前日、校長先生に促されて会場を見に行くと、先生方が皆で絵の下にキャプションを貼っていた。これまででは絵画展の主役となる子どもたちに気を配るので精一杯という感じだったのに、今は先生自身も「私たちの絵画展」と考え、楽しんでる様子が伝わってくる。子どもの絵が行き来することで、子どもはもちろん、親や先生など大人の心も少しずつ繋がりは始める。準備を終えた先生方が「私たちと一緒に写真を撮りましょうよ」と声をかけてくれたことでも、それを実感した。

この余裕のある雰囲気、子どもたちにも伝染する。絵画展に合わせた今回のもう一つのイベントは「等身大の自画像描き」。訪朝した子どもとルンラ小の子どもが一組で行なう共同制作だ。等身大なので、大きなクラフト紙二枚を繋げて床に広げた上に横になり、その型を鉛筆でとることから始まる。なぜ

られている間じっとしている様子は、まさに「まな板の上の鯉」。でも、ルンラ小の子どもたちは緊張と恥ずかしさを捨て



■等身大自画像が完成。

て、迷うことなく紙の上でポーズを決めてくれた。リラックスした雰囲気が、子どもたちの背中を押ししているのを感じた。この共同制作は、完成までに二日間もかかってしまった。けれど、すべての作業を終えておやつを食べる子どもたちに「大変だった？」と尋ねたら、「大丈夫」「けっこうおもしろかったよ」「はじめの時はくすぐったかった」などとご機嫌で答えてくれた。やはり時間をかけて交流すること、そしてそこで生まれる余裕のある空気がお互いの距離をぐっと近くするのだと嬉しくなった。そして、おやつ

の力もやはり偉大である。日本に帰る前日、日本から訪問した子の一人が、急に「私、また絶対、平壤に来る」と言い出した。これまで平壤を訪問した

子どもから、直接そんな感想を聞いたことがなかったので、はっとして「どうして？」と聞き返した。「だって、友だちもできたし、楽しかったし、また来なくての訪問だったのに」「この次に繋げていこうとするこの言葉に、私はぐっと手をひかれたような気分だった。」

子どもから、直接そんな感想を聞いたことがなかったので、はっとして「どうして？」と聞き返した。「だって、友だちもできたし、楽しかったし、また来なくての訪問だったのに」「この次に繋げていこうとするこの言葉に、私はぐっと手をひかれたような気分だった。」

◎

日朝関係は、前進するのかわからない、谷間の時期にある。けれど、平壤の現場にいる先生方は、「昔は保護者だけでなく、子どもの間にも抵抗があった。でも、今では私たちの年中行事です」と率直に語ってくれるようになった。平壤に住む「ともだち展」協力者と私たちは、やっと同じスタートラインに立つようとしている。

『南北コリアと日本のともだち展』に関するお問い合わせは以下にお願いします。  
KOREA こどもキャンペーン  
TEL : 03-3834-9808 FAX : 03-3835-0519  
<http://homepage2.nifty.com/2002/rccj/>

## カンボジア

# おかげさまで20年 プノンペン技術学校

カンボジア現地代表  
米倉 雪子

ど、民間企業の機械整備・維持管理担当としても雇われていく。過去十四年間の就職先を、人数が多い順にあげると、携帯電話会社三社に計百二十八名、建設会社三社に計五十四名、自動車関連四社に計四十三名、同校教員十名、と続く。

また、HAGARというNGOの依頼で、スリランカの津波被災地へ送る浄水器を溶接部門が作った。カンボジアが内戦から復興し、今度は他の被災者への支援のお手伝いをできたという点で、意義深かった。

日本の多くの方々のご支援で、ここまで来ることができたが、

現在、カンボジア政府からの要請でこの学校の移転が協議されている。移転先はトンレサップ川にかかるチュルイチョンヴァー橋を渡って三百メートル行った湿地埋立地で、雨期の増水による土壌侵食や整備工場の収入減（市内から離れるため）など、移転後の不安は残る。しかし、今後もカンボジアに必要な人材を育てる機関として継続できるよう、JVCは同校への協力を続けるので、これからも皆さまの暖かい応援をお願いしたい。

八五年にプノンペンで車輛修理の研修事業を始めて二十年。ポル・ポト時代に多くの技術者を失ったこの国で、当初は人道援助用の壊れたトラックの修理をする人材の育成を行なった。付設の自動車整備工場で月二百台ほど民間車輛を整備して、その収入で工場と学校の全運営費をまかなえるようになり、二〇〇〇年に自立採算した。経営はカンボジア人職員による運営委員会が担う。学生数は年々増え、現在は年に百十名ほどを無料訓練している。その半数は、寮に住む地方からの学生で、女生徒も少数だが学ぶ。大卒者求職難の中、同校の卒業生の就職率はよく、入試の倍率は五十倍にのぼる。自動車整備二年コースと溶接一年コースの卒業生は、携帯電話会社な

## message from the field



# プロジェクトの現場から

写真：国境沿いのトランジット・センター（一時避難所）からカクマ難民キャンプに移送される難民の人々（BHNテレコム支援協議会 堤本氏提供）

## スーダン

# ケニアのカクマ難民キャンプにて

スーダン事業担当  
岩間 邦夫

避難してきたとのこと。ある日、千人以上の規模の武装集団が車でやって来て村を襲った。家族と一緒にいるところを見つかるかと殺されるので、別々に逃げたそうである。それ以来、キャンプに新しい人が到着する度に、到着者のリストを見て家族がいなか探していたらしい。そして、彼の姉をリストの中に見つけたのが〇四年。他の家族は今も消息不明だそうである。新しい人が到着する度に家族の名を探し続け、四年目にしてようやく姉の名を見つけた時の彼の気持ちを想像した。

スーダンを語る時、「アフリカで最も長い内戦があった国」、「最も多くの難民・避難民を出した国」、「海外に流出した難民五十万人以上」、「国内避難民四百万人以上」といった事が語られる。数の多さに圧倒される。だが、サンティノ君のような経験をしてきた人の数も、その分だけ存在している。彼と出会って、これまで数にばかり目がいていた自分に気付かされた。その意味で、彼と出会えただけでも行った価値があったと思っている。

七万人以上のスーダン難民が滞在しているケニアのカクマ難民キャンプ（他にエチオピア、エリトリア、ソマリア、ウガンダ、コンゴ、中央アフリカから合計一万人以上の難民が滞在）を、九月上旬に二日間の日程ではあるが訪問する機会を得た。この難民キャンプ訪問は、アジア福祉教育財団・難民事業本部が主催する調査団の一員として参加した。今後、JVCとしてスーダン南部での活動を検討するにあたって、スーダン難民への聞き取りと、国連が実施する難民帰還支援に関する情報収集が目的だった。そこで、サンティノ君という十九歳の男性と出会った。九二年に設立されたこのキャンプに、彼が到着したのは二〇〇〇年。スーダン南部での紛争のため、家族とは離れ離れになって

## スタッフのひとりごと

### 漂泊する生活、通底する歴史

カンボジア事業担当 鈴木 まり

私の大家さんはすぐ裏に住んでいる。家賃を払ったり出張のお土産を持っていくたびに、玄関先でいつも軽く1時間は話し込む。昭和4年生まれの大家さんが少女だった頃や会社勤めをしていた若い頃の日本と東京、そして高田馬場の街や人々の様子。戦後食べていくために地主が土地を切り売りしていったこと。50年前の話は今とあまりに違い、そして形を変え今日に続いていることもある。

先日、久しぶりに福井県敦賀の地元で環境・反原発運動を続けている75歳の知人に会った。自宅の2階を「資料館」にしている、敦賀の古い写

真や生活道具、戦前～戦後の子ども向けのおもちゃなどのお宝でいっぱい。それは、原発会社が助成して実施される「郷土史」研究ではない、「敦賀のご近所さんたちの、その両親、祖父母たちの歴史・郷土史」である。

その知人が生まれ育った敦賀は、大陸との、そして国内航路の要所だった。湧き水あふれる豊かな里山と、動植物の豊富な美しい湾に囲まれ、何百年も前から農作物や魚介の幸を都に献上してきた。今も、こんなに外から見えるものかと驚くくらいに海沿いに並ぶ原発施設が、都会の電力需要と原発国策を支えている。「港の町」は「原発の町」となり、ひ

めいせ!  
JVCの歴史を  
語りつぐ人…



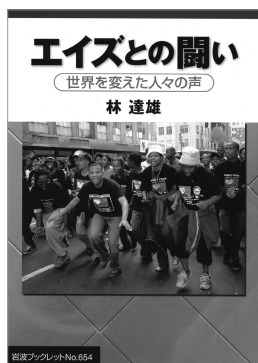
イラスト/かじの倫子

とたび事故が起これば訪れる人は激減し、商店街はシャッターが閉まった店が続く。その昔、阿弥陀如来像が流れ着いたという故事がある磯浜も、国立公園第一種特別保護地区に指定されているにもかかわらず、埋め立てられつつある。

「ヒアリングをもって『反対派の意見も聞いた』で片付けられてしまう」「15歳の多感な時期に終戦を迎え、それまでの価値観が全部ひっくりかえった」と話すその知人の向こうに、カンボジアの政治家や、普通の人たちの顔が見えた。

## 『エイズとの闘い 世界を変えた人々の声』

林達雄著 岩波書店 480円+税



言挙げの本である。病気についでの本ではない。十五歳以下のHIV感染者が三百万人地球に暮らしていて、その多くが治療を受けられない。この現状を変えたいと取り組み続ける医師の祈りの本である。「恥ずべきことだ」…、なぜ、恥じるのか。それは、有効なエイズ治療薬がこの世にすでに存在することを、皆、知っているからだ。

この本には静かな怒りがある。なぜ人々は怒るのか。薬はある、アフリカの国にもある。でも値段がとて高い。だから目の前の子どもに与えることができない。「貧しいアフリカの子どもだから、ただただ死を待つしかない」、そう割り切ることができずに怒る女たちがいる。悔し涙は伝染するようだ。

林ドクターにお目にかかったのは、十数年前、ある街の医療支援活動だった。その後、彼は

大病した。結果彼は、医師としてより、ひとりの人間として現場へ赴くことを選んだ。本当は、誰も医者なんかとつきあいたくはないのだ。多くの医師は、患者の気持ち、後に自分が患者になつてはじめて知ることになる。林ドクターは苦しんだのではないか。そして苦悩を乗り越え、深い祈りに達した。

弱さとは、人類がただ一つ獲得しえた最も重要な心理感覚だろう。相手も弱い自分も弱い、だから相手を責めずにおく、ということならよい。しかし、決して弱い存在ではない特許で武装した巨大製薬企業に対して迎合し指摘せずに済みます、そんな心理は卑劣だ。勇氣ある抵抗運動が世界各地に起こり、つながって大きな波になった。

人権とは、実のところ権利というより、むしろ他者、特に弱者や少数者の権利を守る「義務」のことなのだ。椅子取りゲームのように、立たされ続ける人々がますます増えるグローバリゼーションの二十一世紀、この本に大きな希望を見た。

(長野県南相木村在住  
村医者 色平哲郎)

《開発協力》

THAILAND

タイ

地域の市場づくり

タイ東北部コンケンでは、地域循環の流通システムを作り出すために、地域の市場づくりを進めている。十二月の最終評価に向けて、地域の人たちが何を求めたのか、どのような影響があったのかについて、各村で調査している。

八月後半のスタディツアーでは、日本の稲作についてのパネルを参加者が持参し、村で紹介した。いつもタイの人たちから情報を得るばかりであったが、今回は日本人参加者からも情報を伝えることができた。(松岡)

農村で学ぶインターンシップ

NGOや開発に興味がある人を対象に一年間タイの農村で生活する機会を提供する。現在十期生(二名)を受け入れている。派遣直後は「毎日の農作業の中で何を学べるのか」と不安を感じた時期もあったが、現在は克服し、自分の目的に向かって行動を起こしている。(森本)

スマトラ島沖津波被災地支援

被災地であるタイ南部六県を

対象に現地NGOのネットワークと協力して復興支援活動を実施。ラノン県では、モーケンと呼ばれる少数民族の子どもたちの栄養改善のための給食支援を実施。八月には児童館の建設を始めた。(下田)

CAMBODIA

カンボジア

持続的農業と農村開発(SARD)

安全な水や食糧の確保を目指して、九四年から活動を行なっている。田植えの季節になり、SRI(幼苗一本植え研修を受けた農家はこれを試している。コメ銀行は、昨年の干ばつの影響から、貸し出す米が極端に少ない銀行があり、各銀行で協議している。十一月の中間評価にむけ、各グループ活動の自立度、各農家の複合農園や家庭菜園の実施状況、一年を通じた井戸水の状況等を調査した。(米倉)

資料・情報センター(TRC)

持続的農業や農村開発に従事する人々に資料や情報を提供するために九五年から運営。図書館員の経験者を雇用し研修開始。図書活動や他団体との連携促進を期待する。(米倉)

技術学校

プノンペンとシアヌークビル

にて自動車修理と溶接を学ぶ職業訓練校と付設整備工場。企業側とプノンペン校移転建設及び補償条件について概ね合意。保証と移転先の土地の長期使用については協議継続。シアヌークビル校の建物は、シアヌークビル運輸局の交通安全研修センターとして活用される。(米倉)

調査研究・政策提言

薬草調査・普及担当を新規雇用。カンボジアNGOフォーラムの環境部会、土地問題関連部会に参加し、連携の可能性を探っている。ENJJ(日本大使館・NGO・JICA・JBC)人權分科会に参加。ラタナキリ県先住民の共有林管理を支援するNTFPのプノンペンの総務・会計補佐を継続。(米倉)

VIETNAM

ベトナム

農村開発(ホアビン省)

〇三年から延長期に入った本事業は、持続的農業と環境保全への取り組みの他、外部からの様々な情報やモノを上手に利用して村づくりができるようになることを目指している。その一環として、日本で地元学を実践している吉本哲郎氏を招き、ナムソン村で地元学ワークショップ

を開催した。村づくり委員会や教員・生徒、他の対象村の村づくり委員会代表が参加。村の人々は当たり前と思っていた暮らしや風景の中に、人々の素晴らしい知恵や技術、豊かな自然が詰まっていることを発見し驚いていた。(伊能)

自然資源管理(ソラ省)

自然資源を住民自身が管理していくことによって、生活を改善させることを目指し活動。雨季に入り活動地内の移動が困難になったが、農作物には恵みの雨。住民は陸稲ととうもろこしのモデル栽培を見守っている。七月には草の根獣医の技術向上のための研修を実施。定期的に行なっている住民への家畜飼育研修とあわせて、家畜死亡率の低下への貢献をめざす。(栗原)

LAOS

ラオス

森林保全

七月下旬から九月上旬にかけて、ニョムラート郡、マハサイ郡の土地森林委議を実施した村のフォローアップを集中的に行なった。これまで、森林保全活動では、企業による森林伐採などで、特に問題が起きている村を中心にフォローアップを行

なってきた。今回は、これまでフォローできていなかった村を回り、土地森林委議委員会の運営状況や森の使用状況等を確認した。数村で利用林の木の枯渇が問題となっており、森林区分の変更依頼を受けた。(新井)

複合農業・生活改善

今年、カムアンはここ十年間で最大の雨量に見舞われている。特にセバンファイ郡、マハサイ郡の状況はひどく、対象村でも洪水のため稲が枯れてしまふ等の被害が起きている。米の安定的な確保のため、七月下旬より、米不足が著しい六村を選定し、コメ銀行を始めるための情報収集を開始した。今後も住民との話し合いを重ねながら、最終的にコメ銀行を実施する村を選定していく。(新井)

SOUTH AFRICA

南アフリカ

農村開発(東ケープ州カラ地区)

安定した食料生産と農村地域の復興を目指して、〇一年より環境保全型農業の研修と普及を行なっている。八月に今年三回目のおの畑のモニタリングを九村で実施した。冬の乾期で野菜栽培が困難な時期であるが、篤農家ミーティングで、雨期に向けた

畑の準備や雨水の保水について話し合った。また、環境教育プログラム実施にむけて、学校と調整を進めている。(小林)

### 子どもの教育支援

(ジョハネスバーク市)  
オレンジファーム地区で地域住民が運営するテボホ障害児ホームを支援。ボランティアで三カ月滞る医師の方が、傷の手当てや保健衛生の研修を行っている。(津山)

### HIV/AIDS (リンボ州)

現地NGO「TVAP」と協力し、南ア北部の農村地域でHIV/AIDSの予防・啓発、感染者への支援、在宅介護、エイズ遺児支援を実施。八月から現地駐在員として青木美由紀が赴任。エイズ遺児の現状調査、在宅ケア及び予防啓発活動のモニタリングの見直しなどを行なった。(青木)

## 《緊急対応》

AFGHANISTAN

### アフガニスタン

女性と子どもの健康改善支援  
ナンガルハル県シエワ郡・ゴシュタ郡において、地域の保健状況を改善するために診療所運

営と地域保健ワーカーの育成、安全の水の供給を柱とする総合プログラムを行なう。

### ◎診療所支援/新規採用の医療スタッフ(男女)による診療が開始。

詳細計画を再調整し、評価の指標を作成するためにコミュニケーション調査を実施した。

### ◎女性医療従事者養成コース/支援物品に関して規格や原材料を再確認した。

新学期が始まる九月から順次納入予定。

### ◎伝統産婆の職能向上研修/JVCが研修を行なった

伝統産婆に、産婆用キットの補充とフォローアップを実施した。

### ◎安全な水の供給と衛生教育/現地事務所を立ち上げ、一郡二集村での先発調査を開始。

井戸の設置場所に関して、予定数四十五の内すでに十七カ所が地域住民の合意の上で確定した。また、同時進行の衛生教育では採用したトレーナーへの研修や教材づくりが完了した。(本間)

### シギ高等女学校支援

ナンガルハル県シエワ郡シギ村女子学校に対して昨年度の校舍増設支援に続いて椅子・机等の設備の支援を準備中。(谷山)

### 政策提言・ネットワーク

「軍による人道支援活動のあり方」に関して、連合軍による人道支援ガイドライン見直しの交渉の仕切りなおしを準備中。

除隊兵士のケーススタディを行ない、武装解除プログラムの新提言書を準備中。(谷山)

IRAQ

### イラク

### ガン・白血病医療支援

主にバグダッドとモスルの病院に白血病の治療薬と検査針などの機材の提供を継続中。八月に一万ドル、九月に七千ドル相当の支援を実施。在庫の少ない抗ガン剤等を中心に引き続き供給している。

### JVCも参加団体であるJ-MINET(日本イラク医療支援ネットワーク)が支援会合を開催。

イラク・日本両国の医師が参加し、過去半年の実績と今後の支援予定を打ち合わせた。治療薬の緊急支援と共に、感染症対策のための薬品提供や成分採血装置の提供など総合的な支援を継続することが確認された。(原)

### イラク難民支援

現地NGOのカリタス・ヨルダンが実施している、ヨルダン在住イラク難民を対象とした支援活動のフォローのために看護師一名(吉野都)を一カ月間派遣。聞き取り調査により、改めてイラク難民の生活状況の厳しさを実感した。(原)

PALESTINE

### パレスチナ

### 幼稚園児栄養改善支援

国際NGOと共同でガザ地区の幼稚園児に西岸地区で生産された長期保存可能な牛乳と鉄分強化ビスケットを提供。九月から新学期が開始し、今年度も五つの幼稚園の約五百人の子どもたちを支援する。(藤屋)

### トラウマを持つ子どもへのケア

九月より、ベツレヘムにあるトラウマ(心理的外傷)を持つ子どもたちの治療と教育を行っている特別学校「ホーリーチャイルド・プログラム」を通じ、言語療法や音楽療法によるトラウマのケア支援を開始した。入学してきた三十五人の子どもたちのうち、十一人が言語の問題を抱えており治療を必要としていることがわかった。今後、徐々に個別治療を行なう予定。(藤屋)

### 信頼醸成のための活動支援

十一月月上旬に、「人権のための医師団・イスラエル」と「パレスチナ医療救済委員会」両NGOのスタッフの招聘準備を進めている。東京・神奈川・京都・大阪・長崎で、シンポジウムや交流会を予定。(藤屋)

SUDAN

### スーダン

### 井戸づくり支援(ダルフル)

雨季が明ける十月以降、避難民キャンプの拡大によって負担が増している地域において、農民と遊牧民が共に使用できる井戸の設置を開始する。NGO「イスラミック・リリーフ」によって実施される井戸設置をモニタリングするため、今年中の訪問を予定。また、二十年以上に渡った内戦の終結を受けて難民帰還が始まりつつある南部に対して調査を検討中。(山右間)

KOREA

### コリア

### 「南北コリアと日本のともだち展」

平壤市ルンラ小学校で、八月下旬「朝・日(ちよう・にち)子ども絵画展」が開催され、東京の朝鮮学校の六年生四名と共に実行委員らが現地を訪問した。四回目となる今年には、ルンラ小の子どもたちと共同制作に取り組み、メッセージと共に日本に持ち帰った。また、先生方と日本側実行委員の意見交換会が初めて開かれた。(寺西)

絵画展の様子は本誌九ページを参照。

# JVC国際協力コンサートで、 1年の締めくくりを。

「演奏レベルはこれまで聴いたなかで最高クラス!!」「声、楽器の美しい音色に感動しました」「内なる祈りが感じられたコンサートでした」「クリスマスを前にすばらしいひとときを感謝しています」...。あふれるほどの賛辞をいただいた今年のJVC国際協力コンサート。今年も心に残る公演をお届けしたいと思っています。

この公演を「歌う」「聴く」「つくる」「寄付する」多くの方がさまざまな形で応援しています。ぜひ会場に足をお運びください。

第12回 大阪公演 会場：いずみホール

バッハ『クリスマス・オラトリオ』

12月10日(土) 午後4時開演

第17回 東京公演 会場：昭和女子大学人見記念講堂

ヘンデル『メサイア』

12月17日(土) 午後4時開演

上記両公演ともにチケット発売中です。お申し込みは、JVCコンサート事務局(石川)までお願いいたします。

TEL: 03-3836-4108

E-mail: tomoko@ngo-jvc.net

両会場とも、JVCの活動写真の展示や、JVC活動国の手工芸品販売を行ないます。どうぞお楽しみに。

JVC国際協力コンサートの成り立ち ~きっかけは、ボランティア。

この公演は、1人のボランティアの想いから始まりました。17年前にこの公演の種をまいたのが、JVCコンサート実行委員長であるバスカビルです。JVCの活動現場であるソマリアを訪問した彼女は、「この活動を支えるために自分に何ができるだろう?」と考えました。歌が好きで、ベネフィットコンサート運営経験がある彼女は、「JVCのためにベネフィットコンサートをしよう」と思いつきました。彼女を中心にボランティアが集い、「JVCコンサート実行委員会」を結成、今年をむかえました。

JVCはタイ、開発教育2つのボランティアチームによるワークショップや、JVC全体のオリエンテーションなどを行ないました。2つのワークショップにはいずれも熱心な参加者が集まり、活気あふれるものとなりました。また、共同企画としてフリートーク「私がこのNGO

で活動しているわけ」ボランティア編とスタッフ編、座談会「貧困削減のためにNGOには何ができるか」が行なわれました。座談会には丸幸ビルを代表する論客が集まり、議論の中で、これまでのNGOの功績と、まだ力不足な部分、改善していかねばならない部分が浮き彫りになったように感じました。様々な団体の様々な顔を一日で感じることでこのイベント、今年は参加されなかった方も、来年はぜひ足を運んでみてください。(広報インターン 高橋豊)

JVCの入居する上野の雑居ビル「丸幸ビル」は、なんと十五以上のNGOが入居する摩訶不思議なビルです。このビルに集うNGOが一日事務所を開放し、様々な企画を行なう「NGOまつりin上野」が行なわれました。昨年初めて開催され好評を博したこのイベントでは、各団体が個別に行なうオリエンテーションやワークショップ、上映会などと、複数の団体からスピーカーが参加してのフリートークや座談会が行なわれ、今年は百八十名ほどの来場者がありました。



■多彩な商品が揃うJVCのワールドバザール

イベント報告

第2回 『NGOまつりin上野』

九月十一日(日)東京

ホームページで公演情報詳細や練習日記を公開しています。

<http://www.ngo-jvc.net/concert>

国内ひろば

JVC network

## 募金にご協力ありがとうございます

JVCの活動は、皆さまの募金に支えられています。

### ① JVC 募金

JVCの各国での活動に役立てられます。募金先をご指定いただくこともできます。

口座番号：00190-9-27495

加入者名：JVC 東京事務所

7月計 **4,523,504 円**

8月計 **4,587,595 円**

	7月	8月
無指定	274,383 円	647,854 円
タイ	18,000 円	10,000 円
(津波被害)	1,313,132 円	80,000 円
カンボジア	70,000 円	12,000 円
ラオス	3,000 円	6,000 円
ベトナム	5,000 円	20,000 円
南アフリカ	94,000 円	98,575 円
パレスチナ	2,494,122 円	3,030,800 円
アフガニスタン	64,750 円	252,000 円
北朝鮮	13,500 円	10,000 円
イラク	137,117 円	223,366 円
スーダン	23,500 円	71,000 円

JIM-NET	7月	8月
	13,000 円	126,000 円

※ JIM-NET：日本イラク医療支援ネットワーク  
イラクでの医療支援を協力して行なう NGO ネットワーク

### ② 犬養道子「みどり一本」募金

この募金は JVC 活動地での環境プロジェクトに使われます。

口座番号：00100-8-212497

加入者名：犬養道子「みどり一本」

7月計 **298,000 円 / 30 件**

8月計 **201,546 円 / 25 件**

### ③ JVC マンスリー募金

銀行や郵便局の口座からの自動引き落としを利用する手軽な募金方法です。

7月計 **711,700 円 / 606 件**

8月計 **858,200 円 / 716 件**

## 編集後記

右ページの記事にあるように、JVCは某雑居ビルの高層階に居を構えている。四半世紀も活動しているので、御想像の通りいろいろなものがあり、おいそれと「整理」できない状況が続いている。だが、昨今の地震災害、また関連の報道を見るにつけ、せめて震災対策だけでも進めなければ、と決心。内容もわからない文書ファイルの下敷きになって死ぬのはごめんです。(H)

## JVC 国際協力カレンダー 2006、販売開始!

# MONSOON ASIA



写真：市原 基

来年のカレンダーのテーマは「モンスーン・アジア」。アンコールワットの夜明け、バングラデッシュの漁村、フィリピンの棚田、ブータンへの街道…などなど、身の周りの自然を崇拝し、与えられた環境の中でたたかき、しなやかに生き抜いているモンスーン・アジア地域の情景です。パノラマ写真の2段組。発売前から好評をいただいています。

収益は、ベトナムでの水田に水を安定供給するための水路づくりやアフガニスタンでの女子教育支援などに使われます。

NEW

プレゼントするカレンダーといっしょに、  
貴方のメッセージをお送りいたします。

今回のカレンダーはプレゼントにも最適。10部以上お申し込みの場合には、ご注文者様ご自身が作られたオリジナルのメッセージ(手紙、カード、一筆箋など形は自由)を、プレゼントするカレンダーに同封して先様にお送りいたします。気持ちが届くカレンダープレゼント。どうぞご利用ください。

お申し込み先：カレンダー事務局 荻野

TEL: 03-3834-2388 E-mail: ogino@ngo-jvc.net

## 2005 年度夏募金にご協力ください、 ありがとうございました。

この夏も、このJVCは多くの方からご支援をいただきました。お寄せいただいた募金は、アジア・アフリカなどにおける開発協力や、緊急支援などを通じて有益に使用させていただきます。

2005 年夏募金集計 (郵便振替分)

**1,239 件**

**7,104,515 円**

[募金額の20%以内は管理費とさせていただきます。また、上記夏募金の金額は、ページ左上のJVC募金の欄には含まれておりません。]

JVCは「認定NPO法人」に認定されました。今後、皆さまからの寄付が控除対象となります。詳しくは、本誌裏表紙をご覧ください。

## JVC設立25周年記念シンポジウム

# 「9・11」後の世界とNGO

誰もが安心して暮らせる社会をめざして

2005年11月6日(日) 13:30開場 14:00開演 17:45終了

会場：国立オリンピック記念青少年総合センター・国際会議室  
参加費：1,000円 (JVC会員の方は無料)

第1部 海外駐在スタッフによるパネルディスカッション  
「9・11」後の世界とNGO ~誰もが安心して暮らせる社会をめざして~

第2部 パレスチナとイスラエルの医療NGOスタッフによる講演  
対立を超えて ~紛争地で育む交流と対話~

JVC会員・支援者の皆さまには、別途案内状を送付いたしておりますので、そちらで出欠をお知らせください。  
シンポジウム終了後、同施設内にて懇親パーティーを予定しております。こちらもぜひご参加ください。

## 皆さまからの寄付が、寄付金控除の対象となります。

JVCは、2005年9月26日付けで国税庁から「認定NPO法人」として認定されました。これにより、同年10月1日以降にJVCに寄付してくださった方は、税制上の特例措置を受けられることとなります。なお、控除を受けるには申請手続きが必要で、その際はJVC発行の領収書が必要となります。詳しくはJVCまでご連絡ください。

### 個人の方の寄付の場合

寄付をした方に特別の利益が及ぶと認められる場合を除き、特定寄付金に該当する。よって、その寄付金額から1万円を引いた金額を、総所得金額の合計額から控除できる。**確定申告が必要。年末調整では還付されない。**

### 法人の方の寄付の場合

「特定公益増進法人」に対する寄付と同様の扱いとなる。よって、一般寄付金の損金算入限度額とは別に、当該損金算入限度額の範囲内で損金算入することができる。

### 相続財産の寄付の場合

相続又は遺贈により財産を取得した方が、それを相続税の申告期限内に寄付をした場合、その方又はその親族等の相続税又は贈与税の負担が不当に減少しない場合を除き、寄付額が相続税の課税価格の計算の基礎に算入されない。



日本国際ボランティアセンター (Japan International Volunteer Center) は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられるアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

### ■ JVCでは会員を募集しています。

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年7回この会報をお届けします。

- ◎一般会員 10,000円
  - ◎学生会員 5,000円
  - ◎団体会員 30,000円
- ※それぞれに正会員と賛助会員があります。

入会のお申し込み、会員の方のメールマガジンのお申し込み、住所変更などは会員担当へ。  
s-tera@ngo-jvc.net

会員数(9月26日現在) 合計1,590人  
(正会員 701人 賛助会員 889人)

### ■ オリエンテーション(説明会)へお越しください。

JVCの活動内容をご紹介します。お気軽にご参加ください。(無料。予約不要です)

- 第1月曜日 午後7:00 - 8:30
  - 第2・第4土曜日 午後2:00 - 3:30
- ※会場はJVC東京事務所です。

### ■ E-mail

info@ngo-jvc.net

### ■ ホームページ

http://www.ngo-jvc.net/

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。  
※本誌は再生紙を使用しています。